

日本経済新聞社編「されど成長」(八代尚宏氏へのインタビュー)、

日本経済新聞出版社 2008年1月25日刊を読む

経済思想、市場主義が軸

Q——現在経済学に貢献したガルブレイス氏、フリードマン氏が世を去りましたね。

A . 「二人の立場は対照的だった。ガルブレイス氏は国の役割を重視し、戦後の米民主党政権の経済政策に大きな影響を与えた。一方のフリードマン氏はシカゴ学派の自由主義者として、小さな政府と市場原理の効用を一貫して説き続けた。当初は異端視されたものの、1980年代以降は世界の経済学の主流になった」

Q——国家と市場の役割の重心は振り子のように振れるのでしょうか。

A . 「今起きているのは、振り子ではなく市場主義を説いたフリードマン氏の思想への収斂現象だと思う。教育、医療、貧困解決などあらゆる分野で、持続的な経済成長へ向けて市場原理を生かす領域が広がっている。貧者への少額無担保融資でノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行も、その一つだろう」

Q——南米では国の再配分機能を重視する左派政権が誕生しています。

A . (1) 「外資への反発に根ざした反動が起きている。一方で中国、インドはオープンな市場をテコにした成長が加速している。この違いは重要だ」

(2) 「アジアでは日米欧の多国籍企業が競い合い、国民にも恩恵が及んだ。南米は米国企業の寡占状態。企業や資本家同士の競争がないから富が偏在し、その反動が国家主義的、反市場主義的な政権誕生の土壌になった」

Q——競争が格差を助長するのでしょうか。

A . 「米政治哲学者の故ジョン・ロールズは万人に通用する正義を考え続けた。彼は『機会均等』が担保され、『貧困の底上げ』が実現する限り、上位と下位の格差は容認するとの結論にたどり着いた。この格差を認めなければ富める人も企業も海外へ逃げ出し、その国に残る貧しい人がもっと貧しくなってしまう」

Q——格差が広がる社会よりも安定した社会を望む意見もあります。

A . (1) 「安定した社会とは経済成長のない社会だろうか。そうならば、格差が固定化され身分も固定化される。階級の原始的形態だ。成長があればこそ人は他人のモノを奪うことなく富や希望を実現するチャンスを持てる」

(2) 「豊かだから成長しなくていいと考えるのは自由だが、他人の機会を奪う権利はない。ゼロ成長でもいいという人には、90年代の日本の『失われた15年』が幸福な社会だったのか問いたい。市場には心がないという批判もあるが、市場を基軸とした社会は不合理な差別や腐敗が温存されにくく、公正でもある」

Q——これからの国家の役割は何でしょう。

A . (1) 「北欧型へのあこがれもなお強いが、スウェーデンなどは日本よりずっと人口が小さく、しかも徹底的な地方分権型だ。日本のような国のモデルにはなりにくい。発展途上国では政府三導の経済開発が効率的なケースもある。旧ソ連も途中までは成功していた。だが、日本ではもはやそういった開発主義型のシステムはとれない」

(2) 「政府の役割が大きいのは経済や安全保障の際の危機対応だ。市場が機能するための事後チェックとその制度設計も重要だ。最低賃金制度を守らなかった企業への罰金は低すぎて機能していない。政府の事後チェックが機能しないような制度は改め、市場のインフラを整備するのが国家の大事な役割になる」

P.142 ~ P.144

[コメント]

現在、国際基督教大学教授で小泉・阿部・福田政権下で経済財政諮問会議委員を務められた八代尚宏先生は、市場主義の考えに基づき日本の成長を考え、日本を国家破綻から救った貢献者と高く評価できる。小泉首相や竹中氏、渡辺善美氏同様、もう5～6年政権の中核で活躍して頂けたら、この世界的大不況の中での日本が世界経済の大牽引役になったと確信する。

- 2009年2月4日林明夫記 -